

優秀賞

## わが家の天使

鹿児島県 鹿児島市立中郡小学校四年 柿内 瑚子

弟のえいとは、医りよう的ケア児だ。生後五か月のころ、とつぜんの事故で脳に重い障害が残った。自分で手足を動かしたり、会話をしたりすることが難しい。ほとんどのことを家族に助けってもらって生活している。私はこれまで弟からゼイゼイと音がしたら、鼻や口の吸引はしていた。とつてあげると「はあ」と深呼吸してすっきりした表情を見せてくれる。でも、呼吸器を外し、のどのおくまで気管にチューブを入れてする痰の吸引はこわくてできなかった。だから、これは父や母の仕事だった。えいの痰の吸引は、一日百回以上必要だ。吸引しないと肺に痰がたまって肺炎の原因になってしまう。

この夏私は、痰がからんで苦しそうなえいの顔を見ているうちに、  
「私もやってみようかな。お母さん、横でいっしょに見てくれる。」

きた。口からご飯を食べられない弟は、いろいろから栄養をとっている。だから次は、いろいろからの注入も覚えたいと思っている。

えいとは、ほとんどのことを家族に助けってもらって毎日を送っている。さらに、祖父母や訪問看護師さん、りょう育の方、医師の方といったたくさんの方々に支えてもらいながら生きている。自分から何かを言うことや何かをすることはできなくても、えいとは言葉に表せないくらい大切な存在だ。家族が生活の中でどんなにいらいらしたり、落ちこんだりしても、えいを見るとき、そのままの自分でいいんだよと、心がしぜんとおだやかになる。母に抱っこされたえいの前で、私が踊ったり歌ったりすると、えいとの目がきらきらして、家族みんなが笑顔になる。家の中にたくさんのお花が咲いたみたいになる。えいとおかけで家族の心が一つになる。

「えいちゃんは、天使だよね。」

私が言うと、母は横でにっこりほほえむ。わが家の天使は、今を全力で生きている。「今を大切に」私は新しい毎日をすごしていく。



と言って、吸引器の前に立った。

「えいと、きつかったね。今から痰引くよ。」と声をかけて始めた。いつも母がしているのを側で見ていたが、やっぱり気管にチューブを入れる時は、いたくないかなときんちようで手がふるえた。でも、私がやればえいとが楽になるんだ。必死に、手順を思い出しながら吸引した。足ぶみスイッチをふんで吸引完了すると、全力でかけっこした後のように汗びっしょりだった。えいとを見ると、笑っているように目をぱっちりあげて私を見つめていた。ほっとして一気に力が抜けた。

「ありがとう、瑚子。助かったよ。」

母にほめられてちょっと照れくさかったが、私もできた、力になれたとうれしくなった。その後、父や母にチェックしてもらいながら、何度も吸引のお手伝いをして、回数が増えるにつれて自信も出て